

令和元年度東北福祉大学外部評価委員会報告（令和元年7月19日実施）

外部評価委員：委員長 大島 巖（日本社会事業大学・教授）
委員 進藤 聡彦（放送大学・教授）
委員 白石 洋司（株式会社進研アド取締役）

1. はじめに

東北福祉大学の内部質保証システムの一環として、原則4年ごとに実施される令和元年度外部評価の結果を、以下に報告する。

東北福祉大学外部評価は、前回平成27年度に「リエゾンゼミⅠ」をテーマに行われている。今回は、外部評価委員会の開催案内と、その中で実施する「AO入試についての現地調査」の依頼を受けて、外部評価委員会が、令和元年7月19日（金）11時～15時30分に、東北福祉大学管理棟3階第1会議室において開催・実施された。

外部評価委員会には外部評価委員として、大島巖日本社会事業大学教授、進藤聡彦放送大学教授、白石洋司株式会社進研アド取締役の3名が、また東北福祉大学から、寺下明副学長、渡部純夫入学センターセンター長、阿部裕二教務部部长、千葉幸喜入学センター副センター長、白井秀明教務部副部長、門馬利光企画部主任の6名が出席し、開催された。

外部評価委員会では、まず、事務連絡、寺下明副学長からの挨拶の後、「AO入試について」（説明者：入学センター副センター長・千葉幸喜氏、30分程度）、「AO入試で合格した学生の状況」（説明者：教務部部长・阿部裕二教授、20分程度）の説明があった。

その後、「AO入試で合格した学生へのインタビュー」が、総合福祉学部社会福祉学科2年学生、教育学部教育学科3年学生、健康科学部保健看護学科4年学生に対して行われた（25分程度）。引き続き関連施設（せんだんの杜）の視察と実学臨床教育実習生2名（総合福祉学部社会福祉学科1年、2年）へのヒヤリング（計20分程度）が行われ、委員打合せの後、最後に講評と意見交換（30分程度）が実施された。事前打合せや昼食時、移動時間の間などに、随時、千葉幸喜入学センター副センター長、門馬利光企画部主任から補足的な説明を受けた。

外部評価を行うに当たっての主な資料は、「平成30年度自己点検・評価報告書」（2019年5月）、「Your Way 2020／入試ガイド2020・東北福祉大学」、「令和元年度学部評価委員会・AO入試」（千葉入学センター副センター長説明資料）、「入学者の追跡調査等による選抜方法の妥当性の検証：2015年度～2017年度の入学者」（阿部教務部部长説明資料）、「東北福祉大学&保健福祉医療等グループ関連施設」、「With You 2020: Campus Guidebook・東北福祉大学」である。

2. 東北福祉大学 AO 入試の取組みについて（平成30年度分を中心に）

1) AO 入試の概要について

千葉入学センター副センター長の資料および説明に基づき、東北福祉大学のAO入試の概要を整理すると以下の通りである。

東北福祉大学のAO入試導入は2002年度からであった。背景には、東北福祉大学の建学の精神である「行学一如」があり、「理論」と「実践」を融合させる必要性が議論される中、1996年に最初の「関連福祉施設」として「せんだんの杜」が設立された。その後、各種関連福祉施設が整備されたことを契機に、大学ができることは何かを検討する中で、アドミッションポリシーを明確にし、「福祉実学臨床教育」の一環として学生を福祉実践現場に送り出し、少人数でも体験実習を用いた入試を取り入れようとAO入試

が導入された。

その結果、就職先などからの卒業生の評判が大変良く、また他の学生に対する良い影響を与えていることを受けて拡充することになった。但し福祉心理学科など福祉以外の領域が求める人材像とのずれもあり、AO入試の実施方法を3年おきに見直して今日に至っている。

AO入試定員は、当初35名だったが2019年度入試では124名（3.5倍）に増加した。現在、総定員数1300名の9.5%に当たる。志願者数は281名おり、対定員競争率は2.3倍である。

志願者数は2007年度入試の598人が最多であるが、2011年度入試より出願資格に評定の設定（評定3.5以上）及び第1次選考で学力検査（2科目）を課したことを契機に、以後、志願者数は各年度ほぼ200名台に定着している。

当初、上記のとおり、すべての学生に第2次選考で「福祉関連施設」での1泊の現場実習を課していた。翌日のグループディスカッションや面接では、関連福祉施設での1泊2日の体験実習を含めて評価の対象にしていた。また、AO入試合格者については、当初実学臨床教育を課すことにしていたが、現在は任意である。また、実学臨床教育は総合福祉学部生の科目となっている。

第2次選考の学科ごとの選考方法については、社会福祉学科は当初からの「関連福祉施設」での1泊2日の現場実習を用いているが、社会福祉学科以外の総合福祉学部、総合マネジメント学部、教育学部、健康科学部の医療経営管理学科は、課題レポートとプレゼンテーションを用いた方法、医療経営管理学科以外の健康科学部は課題レポートと状況設定問題ディスカッションを用いた方法を取り入れている。

I期・II期のどちらも受験可能であるが、同じ学科の受験はできない。また学力検査は「外国語＋国語」か「外国語＋生物基礎」で受験する学科によって異なる。

合格が決まった入学予定者（他の特別入試合格者も含む）には、2月まで月1回の「入学前教育レポート」とその添削、「リエゾンドリルベーシック」の高大接続問題を8割をクリアすることを課している。

2) AO入試合格者の入学後の成績等実績について

阿部教務部長の資料および説明に基づき、AO入試合格者の入学後の成績等実績について整理すると以下の通りである。

AO入試合格者は、概してモチベーションが高く、入学後の成績（GPA）も高く、中退率は低い。また、ボランティア活動実績として福祉ボランティア活動I～IVの単位認定者の割合が高く、就職内定率も高い。また就職先として、「社会福祉施設」や「保健医療施設」の割合が高い。ゼミの中でもリーダーシップを取れる人材、社会問題について社会に発信できる人が多い印象である、という。

3) 「AO入試で合格した学生へのインタビュー」および関連施設の視察結果から

「AO入試で合格した学生へのインタビュー」と関連施設の視察時の実学臨床教育実習生2名へのヒヤリング結果から、学習や将来のキャリア設計に関して大変モチベーションが高く、強い意志と目的を持っており、現場志向性の高い学生であることが確認された。大学から報告された「中退率の極端な低さ」と極めて相関性の高い結果となっている。また、自らの目的や目標を一方的に伝えるだけでなく大学が求める条件を十分理解したうえでトライしていることがよく分かった。アドミッションポリシーに関する質問において、東北福祉大学のアドミッションポリシーを十分に理解してAO入試に臨んだ旨の回答がインタビューを行った3名全員から得られた。このことは、AO入試がアドミッションポリシーに沿った学生の受け入れにも繋がっていることを示唆している。

関連施設の視察では、実学臨床教育とのリンクが印象的であった。1年次、2年次か

ら実践志向の強い AO 入試を経験した学生が、現場での経験を積みながら成長して行くことを、大学・関連施設が連携しながら支援していることを理解できた。学生が「準社員並み」の実務にトライしていることは、他大学に比しても特筆すべきことである。実社会に出てすぐに有用な人材として評価される根拠と思われる。

4) 講評と意見交換から

関連福祉施設の現場を巻き込んだ大きな改革であるので、教育プログラムの変更も必要になり、またそれは教員の負担増にもなる。これに対して、教学組織の理解がどのように得られたかについては、一部意見は出たものの、建学の精神である「行学一如」の下、「理論」と「実践」を融合させるミッションを踏まえた改革に対して、大きな異論もなく大学教職員、関連施設職員が一丸・一体となった改革が進められた。

3. 外部評価委員の講評・所見

1) AO 入試の実施方法について

大学入試は、いうまでもなく入学後の学習を進める上で前提となる知識、技能、態度を備えているかを評価するために行われる。同大学の AO 入試では、第 1 次選考において、一般的な調査書・志望理由書・活動報告書による評価や、自己アピールなどを内容とする面接評価に加え、学力検査による評価を行っている。学力検査の科目は入学後に幅広い知識が必要な教育学部などでは、その基礎となる国語と英語を課しているのに対し、生物学的な内容の学習が主となる健康科学部の保健看護学科やリハビリテーション学科では、英語の他に「生物基礎」を課すなど、学科の学習内容に応じた科目を課している。

また、第 2 次選考では表現力に主眼を置いた面接による評価に加え、事前に与えられたレポートに基づくプレゼンテーション、PBL (problem based learning) 型のディスカッション、関連施設での 1 泊 2 日の体験実習に基づくグループディスカッションなど、各学科が定めた課題を課している。これらは、入学後の実習や将来の社会人として活躍の基礎となる課題発見能力や、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを評価できる内容となっている。このように、同大学の AO 入試は入学前の受験者の資質を見極める評価の方法として、多面的で極めて妥当性の高い選抜方法が採られており、他大学の範になるような内容となっている。

なお、AO 入試により合格した者に対して、月 1 回の「入学前教育レポート」と高校までの学習内容の確認や補償教育のための 5 教科の「リエゾンドリルベーシック」を課している。前者に関しては、提出を求めるだけでなく教員が添削してフィードバックしている。また、後者については大学で進捗状況を管理するなど、責任のある対応がなされている。こうした指導は高大接続の円滑な移行を可能にする機会になっている。

2) 大学ブランドを象徴する AO 入試

1 泊 2 日の体験実習の導入や実践的な課題のグループディスカッションなど具体的な選抜問題を確認したが、合格点数を収めるには相当の準備が必要であり、高校生によっては他の大学の入試準備への影響も考えられ、大学がどのような人材を求めているかが一目でわかるような選抜になっている。

AO 入試は東北福祉大学が、社会のニーズに応えるために積み重ねてきた試行錯誤のたまものであるが、「行学一如」、「《理論》と《実践》の融合」、「大学と社会貢献」を入学選抜の段階から入学志願者に理解させ、目的と志の明確な学生を確保し、実践と研究を通して社会に通用する人材を育て上げる一貫した教育システムとして機能している点で優れた取組みと評価できる。

AO 入試導入後も、体験実習の導入からはじまり、学力検査やグループワークも課さ

れ、AO入試のあるべき形へと磨きあげ、継続的改善を進めて、ブランド向上に貢献した点も特筆すべき事項として指摘しておきたい。

AO入試一般に対して高校現場でイメージされる「門戸が広くて緩いから受験を勧める」という姿は見られず、東北福祉大学のAO入試は、「希望をするならしっかりとした準備と覚悟を持たなければ通用しない」という評価を受けるに至っている。

3) 大学の教育プログラム全体との関連

東北福祉大学のAO入試の出願から入学に至るまでの過程を俯瞰すると、AO入試がたんなる選抜の機能だけでなく、教育の一環として機能していることがわかる。AO入試自体が、入学志願者の成長や覚醒の場、貴重な教育の場になっている。

このような入試を実施するためには大学として大きな人的、物的なコストがかかっていると思われるが、大学全体の取り組みとして、協力体制ができていると感じられた。そして、その成果は極めて高い卒業率や、学科の専門性を生かした進路を選択する者の多さに表れている。

外部評価委員会の最初と最後に、AO入試導入の目的について説明を受けたが、「実践の場から頭でっかちな学生が多くて不満である」との問題指摘に対応すべく、大学の建学の精神である「行学一如」、「《理論》と《実践》の融合」というミッションを踏まえて、行われた入試改革であった。入学後の実学臨床教育とのリンクを行い、東北福祉大学の教育プログラム全体を改革する大きな起爆剤となったと考えられる。AO入試入学者も、大学の理念・ミッションの「伝道師」となり、ゼミやその他諸活動において、リーダーシップを発揮することに繋がっている。

大学組織、大学教職員、関連施設職員が一体となった改革が進めたことにより、東北福祉大学のブランドを高めることに大いに貢献したとみることができよう。

まさに東北福祉大のブランドを象徴するAO入試の仕組みであろう。本来あるべき「学修者本位の学び」がAO入試からスタートして、大学の教育システムにおいてすでに日常化していると考えられる。

4) 今後に向けたいくつかの課題

以上述べて来たように、東北福祉大学の建学の精神やミッションに基づいて、大学ブランドを高め、大学の教育システムを、より理念の明確な質の高いシステムへと変革する上で大きな貢献をしたAO入試と理解するが、今回の外部評価に密接に関わる「平成30年度自己点検・評価報告書」におけるAO入試の記述はごく一部に限定されているように思われた。

大学入学の入り口（入試）から、大学の建学の精神やミッションに基づき、魅力的な東北福祉大学ならではの教育システムを構築し、学内外に示していくためにも、AO入試の位置づけはより明確に可視化して（図に示すなど）、今後は「東北福祉大学の教育システム」の象徴として、よりインパクトのあるものへと強く打ち出して頂きたい。

今回の外部評価で高く評価したAO入試であるが、この入試区分で入学し、その後の教育システムと連動させて育成した人材が、入学後、あるいは卒業後にどのような領域の能力を高めているのか、客観的で科学的な評価分析が求められよう。それによって、東北福祉大学のAO入試の価値がより明確になり、大学ブランド向上にも資するものになると考える。

さらには今回検討したアドミッションポリシー（AP）と、カリキュラムポリシー（CP）、ディプロマポリシー（DP）との相関性をさらに客観化し、教育成果の可視化が可能になれば、より一層人材育成の成果が顕著な大学として評価が高まるものと期待される。

最後に、今回外部評価で取り組んだ「AO入試」の評価と、大学全体の年度別「自己点検・評価」との関係が少々わかりにくかった。今後の外部評価に向けて、ご検討を頂けると幸いです。